海に魚がいなくなる（市川町）

むかしむかし、といったところで、はっきりいえば、孝徳天皇〈こうとくてんのう〉さまのころのことやから、いまから千三百年ほどむかしの話になるわけです。白鳳〈はくほう〉時代といっていたそうな。

姫路の東北の二十四キロほどのところに、海抜七百メートルほどの山がありました。あとでしらべると、神崎郡市川〈かんざきぐんいちかわ〉町の瀬加〈せか〉というところの、笠形山〈かさがたやま〉だろうということになっています。

なんせ、一千年のむかしの話のことですから、そこが、そこだったというはっきりした記録がありません。

が、とつぜん、そのてっぺんに、金色〈こんじき〉の御光〈ごこう〉がさしました。

「あっ！、わしゃ、眼がくらみそうだ。あの山からおっそろしい光にあてられた。」という男が出てきました。

「あの山って？。」と、村人がきいて、われもわれもと、その七百メートルほどある山の見えるところへ出かけていきました。

「あっ、ほんまやのう、御光〈ごこう〉というもんは、こんなにひどうこたえるもんかのう。」そういって、わざとうしろへひっくりかえるものもありました。

「わしゃもう、目をやられて、なんにも見えんようになったわい。」と、いう人も出てきました。

御光〈ごこう〉というのは、わずか六センチに足らない、お薬師〈やくし〉さまからとび出していました。

ところで、もうひとつ、大へんなことがはじまったのです。

御光は、遠く大塩〈おおしお〉（姫路市）曽根〈そね〉（高砂市）明石〈あかし〉方面の海岸まで、あかあかとてらしました。

この光にびっくりしたのは、そのへんの海に住んでいた魚たちです。たいに、まぐろに、いかに、いわし。

「大へんじゃ、目がくらくらっとして見えない。こんなところにおっちゃ死んでしまう。」と、魚たちはつぎつぎと、よその海へにげていきはじめました。

おしまいには、たこつぼにいた明石のたこまでにげてしまうありさまです。

「大へんじゃ、これじゃ、わしらの商売の魚が、一匹もおらんようになる。」この大へんじゃは、そのふきんの漁師〈りょうし〉たちでした。かれらは、顔色をかえて、熊野〈くまの〉（三重県）の権現〈ごんげん〉さまにこのことを告〈つ〉げ、おたすけをたのみました。

熊野の権現さまは、さっそく、このねがいをきき入れて、千ほどもある青草を集め、瀬加の笠形山にあるお薬師さまのお像〈ぞう〉をかくしてしまいました。

のちにお像は、となりの金蔵〈かなくら〉山へうつされ、それからずっと、そこにまつられているといわれます。

この笠形山は、富士山の形ににているので、播磨富士〈はりまふじ〉ともよばれています。